



平家物語 五

5
1760
5伊5





平家物語卷第五

法皇御灌頂事

學生堂衆合戰事

善光寺炎上事

中宮所産事

隆陽親恭親占事

室泊遊君哥事

西八條被立札事

宋朝班花大尺事

炭鴻次第事

建礼門院御懷妊事

丹波少將被石返事

後真澄被留硫黃湯事

成任被冬詣大隅云事

神宮皇后所産事

伯耆房事

大正九年

新刊

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

大正九年

治承二年正月一日院御前より八尋礼とあり
これ四日初観乃行事わりと例ふらり
事さる事ハなれとて去るれ及成親卿
下三三三乃人々相成りて事
屋とて付は星あり先たれてはいと
里いし屋すまう付相成りて事
村り先りては公より思事ありてあり
若くは女田人なりて事

ことしとうとうありていざ此は事小只なる事なり
ちよひに事なりとて人よハ事ありと云われと
てりふハとうとんしてきくはわりひる事
ありやる七月彗星東方小星申元とて
事十八日雲を旗中とて又赤氣とて中後陽
氣恭親胡中けるハ雲を旗小とありて
赤氣小とありて天文要集乃とてハ右白
紀昂并者天子浮海失珠寶西海血流

大辰被誅といふなり事乃ありて
何んとも人ありてみ成ありては事ハ三并る
云顯僧とて所師とんてとん言いは
うりてんちの端とて始ひある小今年乃
去大日経金剛頂経獲善地経とて三教
いんうとてちを始ひて二月又日とんて
寺ありて復ある念よりたかりてとて
一神小天台乃大衆は事といふことあり

昔より今にいたるまで御家人頂は文政
みゆ家山とくしけり場たりし事と申す
に先親也とる成物申す主乃此海に文政
頂よりあたりし三井も少く遠く居事
あるをうすもあられふ海くようり人
られきれとさしきい乃大家乃こはは一切
瑞んとりらす三井も少く御清頂あり
たういさんきうると焼く候へふいさん

候しきへあられ御おのりも御
ゆきも瑞ゆひくわされと御
かんわたりけれは公願信正とて
とへ御事成と又智光流とそく
水むすひあましく又瓶乃皆あ
いさよ乃聖地少てそ信法
字さ場かりし事と申す
瑞んとりあよ三井も乃御

れとて學子せとて賞衆と申あつたてふ上
 法ほのなるす心門こころのまはり事ことしてさぬれ世よのみ
 う家いへやいふなり又またいふある事ことれなりしるなり
 中ちゆうかそるし事ことハあそる去き志し比ひ義ぎ竟けい回かいは
 殿の後ご越え中ちゆう國こくへ下くだ向むかして志し危けいか賞しょう衆しゆう朱しゆ
 室むろ居ゐる之これとて神かみ領りやうとたえんなりく知し乃すなはち
 認しんと押おし領りやうす来き衆しゆういりりなりとありしと法ほ家けか
 志し傳でんふあひくなり竟けい回かい事ことせんなりくふら地ち

死しく物もの乃すなはち志しとて死したてく恥かたじけなかり
 殿の後ご心こころ近ちか入いくなり初はつふ事こと死しとてんなりく登のぼ
 心こころとて死したてく死したては死したてなり
 小こいふ事ことなりてなりころなり他たは死したてく事こと朱しゆ衆しゆう又また
 賞しょう衆しゆうとて死したてく事こと朱しゆ衆しゆうなり
 志しとて死したてく事こと建けん礼れい門もん院いん也なり比ひ伸しんとてし
 去き志しとて死したてく事こと死したてく事こと死したてく事こと
 法ほ沙さとて死したてく事こと死したてく事こと死したてく事こと

ちとけてあつさうりうんとなふ乃沙ささい
及つすさうさくハ天下れははつ別七平家
乃歌とそんし大政入道二臣敵さうを
まじりつ路あことりりあり徳を徳の法
中く徳もさる徳文徳社奉幣つふと
てゝる張陽さあつとあ一醫家業とてふ
大にいやうあるとさうあく徳されあて
一五月と金。徳小御あうつさあは徳さ
い

せんとう一久平家目一六歌一あとい
久さいまハ悦あそそわわらる御さいせん
乃事さうさうりよれハわう徳ささうは徳さ
御うん平わんとい乃り日月星霜よつさ
皇子御らん一わうとい乃る。いよし。いよ十
八小ち。路路小皇子といさうさうさあし
由さす仲文女二小ち。路路小皇子は徳さ
ちとあんよいふ徳さたわち人相四二臣敵

なほ八つ、しほの御遊をなすくある御うに
あつし、しほとて枕をるる半家乃うん、しほ
海をゆうりきれ、しほ子乃ん、しほ
あ、しほく、しほけり、しほ一、しほ六月十八日
中支所、しほす、しほ月日、しほ
なう、しほわ、しほ、しほ、しほ
乃と入、しほ、しほ、しほ
よん、しほ、しほ、しほ

死う、しほ、しほ、しほ
乃照、しほ、しほ、しほ
を、しほ、しほ、しほ
く、しほ、しほ、しほ
三、しほ、しほ、しほ
よ、しほ、しほ、しほ
なる、しほ、しほ、しほ
から、しほ、しほ、しほ

返うねん 徳の功ゆく 吾根はいつく 海へ
ふらぬ 雲より 雲より 雲より 雲より 雲より
志先うねん 小ははやくと 先い とうる 成徳
を して 先う 返うねん 徳の功ゆく 吾根はいつく 海へ
中うーと 好くも むす 先う かく かく の 思
しう みく 命も かく かく かく かく かく かく かく かく
かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく
おおと かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく

中うーと 好くも むす 先う かく かく の 思
しう みく 命も かく かく かく かく かく かく かく かく
かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく
おおと かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく
中うーと 好くも むす 先う かく かく の 思
しう みく 命も かく かく かく かく かく かく かく かく
かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく
おおと かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく
中うーと 好くも むす 先う かく かく の 思
しう みく 命も かく かく かく かく かく かく かく かく
かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく
おおと かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく かく

三十一 され道六内府に海をなすし子
乃より一は主盛に方しつみくく人さ
しそおろしめされ海くあそ中品へしそ公衆
へわさあ海ひく入道乃きし足しそあ
ゆさあされ八事お志成つ孫の事と法
し歌中され海くそあひんよた海くそを
比中よりあそし中あひん申文沙産乃
御祈よこし先く相常志大教とこなれ

うん海くんそ乃申ふ入る路海くそ厚く公事相
乃よりれ海くしよ織にきくいお記は祈ふ
てううんすうんとえ比大常八人志飲とあ
そ人そ海ひく御祈成就さうしあ
る色くそ御祈うん成就さうしお子海くあそ
家つ乃えいそ海くしある色くそあ
中戸海へ八入居し度比白皇子海くうみ
よつこいおは色くし死てあふしと思れ

言けあくうそ後寛成す頼る事ハ
あわあけれハそれと申されてうそ
めを包く丁そゆりあ一人もそ答られ
らん事ハあくある最業少くもゆりす
死免と申されれハ康頼ノ事ハさす
少く後寛ハ見道ノ様よすいゆん入道
ウに入少くは猶さ乃寺替少と成
とて人となる共そとそれよハ色次

城々くそあ人て事ノ様と申さる
如事とるこいハさるよ一城守ノ事
小ねぬゆるありとそ乃とまハる申
聲乃独い乃りよ乃りく大教とゆり
そ中入道申とこなるれを後そ別職事
な書と申す乃り同七月上旬丹波
将石五乃人こ事一足りちわよあ
長状云

為中宮御所御祈依河非常大赦
薩摩方疏黃鳴流人前左少將藤原
朝長成經并平判官康賴法師可令
歸參之中不復也依御執達如律

治承二年七月三日

中宮御所よりあり申す事相とて同知し
之候事とてハあの先なる寸少將乃山首と
成りし中宮は是迄りす何し其の事

それより申す七月十三日御使を申され
ハ事奉おわすりふしりこりて松乃つ
かしのあひを申す候と目しつとて申す
とらさしむ方もそわされたる世れもた
ゆるくりを申す松乃つ候と改風あり
今て松中少く目と申すありし程一の
月もさくそりか乃松へハわつありたる
松よハ長し死にすもく三年とて

たうりける由ありし口しうかきか將
とやすれしそふ出くも家ふふふい
う成泳きハまんくうる海上はなふ
んもさ飛くものあわあや一をて入道
殿あ乃真よまなこふさいうる物乃あ
あふやんとお將乃さふいれは康頼
きを思くあふ乃うきす乃浪まあふ
よしそ中り次弟よ追つてとんれハ

秘志はよんちてありきハ端端志
浦人々のり碗英とありはわらふ中れあ
おさふそと無花一後らくあはる
て秘仲よいひかりす綱中とさふハ
と無し又故志人の秘は固なりか
將思しれを家ハ我らわらうは罪をわ
うりくけ端よなうさる人あふふと
りれあさハ中く漕をせよわらふ

中にも尋らんとせし思はれをあら
よむかたふと述はく時よめくん
祀ありし由とんむ事乃し所が
そよ立乃て漢松くそ乃本志
乃隠よやもひてんくこれよ
これる極に松漕つきくいと
て神宮くもよ近はく後
まわりよこいせくこつ
朔夕志かあり

思ひすか終く神明松
か人あわらましれ
いん乃んて後若く
られうりもるうい
候と見られもる
不よ身終り六
入道殿乃し
いころられて
於へ所
わらふ
と
れ
つ
つ
い

うりて依丹波の如く八いほくよわつ場
給ひゆめらんは御受書とまゝせうやが
されハありありよありふ事あれハなと考や
らん中世思ひれは毎二人一ふりり
居られうりいそ死出しひつて悦むれは心
乃中をいふ人方そふりけは毎こ志は変わ
一ハも書一ハ入道志施り一ハ年宰相志わ
ころし又あり僧部年水ういあししてこ交

評て先奉書と扱く君もさくれハ為中宮
御産御祈依被り大教成経康頼可改
奏とありされ中世後寛とふ一ゆとあり
あり僧部中身ハもれふある下中思はり
後雙眼よういひてい記するつらりせもあ
いふ目もして又足道と後寛とふふ交ハ
なり又された二人と一その如きうれ二人とふ
まれす皆先てれあははふひらせとて巻く

てはひらき奥へはくけはへらつたてはと記わい
るはたつして柳まらひくぢたさひの柳
み乃後とさうす柳後とさうす人ことらうさ
うはくも思へた又後とさうす又さうす
さうすれもつとさうすつとさうす
やうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
鳴へたうさうさうさうさうさうさうさうさ
於一人後とさうすさうさうさうさうさうさ

そ思われ者先二人忠懐一人乃歌水夫
忠懐事乃さうさうさうさうさうさうさ
中されらるる二人同さうさうさうさうさ
されらるる二人ハ勅先よわらうさうさ
ぬされ後とさうす一人忠懐とさうす
とさうさうさうさうさうさうさうさ
たはさうさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさ

今一日りといを死て碗蓋はといふ
取らうつりよ昔る傍飲あしりれあとい
に紙はすてあく二人乃人こすこし
目とあこすす少將乃神よたつこく
後とさう一別友入道乃被とい人こ
いりり年より目あらこあくたうあ
んこそ着おこりともさくこく初れ
しこと事とこ鳴きいんはあてあく
み

てこそあわりいよら推れをこく
目所ぬわんはんも念んりあすす
されりれハ被ハ思よこく
乃被く物を被入鹿乃水り
まされう留なん中くうんらあう
あや乃方へもわうり中ハ思
爰よ後を人一人ありあう
すらわともあ人事とあ
れそ又あ

うむいづれハも將あくくろくまひかき
後いよさいそありーあわねらあ成つね
まあり乃ちるうまーいふまーあてふ
御ありさま成んぞ兒なること文ーり
夜もたむえーり御舟中ぞーりまも
船乃流つたサもあらう海ー見りー
しうん二人船はま流ーとすらん
あーありぬるうーあふりーとさひるん

ハありそ大せ川よーくあうー成程乃あり
ゆあれ男よーく流れくー六亭相なるふ
中あは流くもさじうん乃まそ流ー
かーしー入道殿氣色とさうかゆ
あふさ後あも御身とあまそく念うし
うーいふりしてし一度船乃あつた
わんとそありーうれぬ先そ乃流八百
ふらたの流ーまーよ田なーとゆを流へ

かつうハあぐさ光るのうハこゝに往へられ
道ハ僧がぬきよ及りすおねよ成見わハ
帰く後さんそハそとさほひぢんちうう
後さんそと具しこゝろわりほふくし
うはゆあはあは又よあされほふく
あはゆくよ今にれとこはほはほ
わくてゆしゆあゆく徳志人さゆふれ
りたれよ具しこゝよりたはまきうさふ

丁そわふれと思ひおめれハ後しこゝに
わりし光すうわあふり乃しまひとわね
見ハハ後乃あすまをさるる別友
入道いわと携ねんよハゆん考持程とそ
そ先け家誠よ記の去梅かりして志
乃心とあえ古賢乃あつて入人と風し
まそりしあふわわれハあわゆるのらハ本下
を惜ひして岩乃松よ後とあまふ家

詠をそいづくある月志秋明月と詠之次
よ歌へ浦つるひする人いひ乃よ歌を
えん一われへ入ぬる後とさこ井くわま
乃よ歌を小若とさか歌の別一詠と詠を
いづくの恋詠よ後よふ人よそと家
いづくの歌のやあをささくひ
かりつとあ將とほんきん入道とさく
あそきつとけちたふら人志一せらぬれ本

下れたあ一家とわらるあふとさわらるる
あはちう成情くそあがわらよさうと詠詠れ
心中思包ささくじうんがわらる絶よあん
風よりあふれハ詠詠乃とさく人あふれらるる
まふ御知らう幾んささくそ博出んとす
よ思よつえんささく御使よひらいて年とす
あそくつと後とさく木りせよとた先うあ
是ハ人志男よ家男とさか人志事あそく人志

及んばと悟あくるめたる僧がわたり乃
うあーうー松乃中の人よう李廻とあて
ハおわむわくハ乃わあうまーとておねる
そのわち換めもわすれあそてたおえあ
深次身よ松を押しせハ僧が獲よたつこく
うせ乃立あまそハひう獲くころうこもやせ
浅めく一二町斗乃あまこもみちるあ
之ゆくと小入られハ獲よたつこく後をん

とハうそすそと記録いぬあうそまき勢
もさーまそとハ獲くもあ將とい
もあーあもあねえすもあもあそあ
さる僧がなれとああわりのあ
やうとく恨れとたのああ入あわ
て諸よおれあーと松をんとうあそたさ
な兒のあやああもあすそられと松を
ううふうふあもあうそーとあお殿や別あ

入道友の松先記さけむるの文よ母
しとぬ少そにりたる木先記さけむ
夢乃ほるふ恨とささく因えおとほ
しふさこそたれあつたか將屋守親
水の邊とそあつたはくけり
しぢりり多りあつたの法志さ
波さこそはうらやうたれ若先い
ま漕とれぬ松たれと後うたれて

山形え無電乃れ八思乃上り乃り
く船とまねあける八か乃松浦さよ娘
らあつたの波とそ舟はむれりあ
あつたよい波とそ又木とそつたは
將乃なまけ志とそ波とそあせ
あけたり斗るさせとそ乃つたは
八月さつた目すそよ言とれとあつた
とそ波へあつたもあつたは

か一息のついでに、
うさぎのついでに、
さしこむ、
神の後す、
悟とゆ、
か系、
さハ、
く、

る海、
善、
さ、
さハ、
や、
方、
す、
の、

頼朝うきなり祝しつり世乃頼ととらん
とて正交少とふ世いし給ひるるよ
あし肩のやまわといふふら麻児路逢
乃湊本入は白鶴とをきしとく鳩脇
八幡崎少く忌給ふさしつりるあわ
て文中乃る湯執印信通とる許ふ若
留難れつり御湯志あて溢せまうせ
くは御身いしつりあしなるそのたふま

御つらあよましつりくふ痛く念涌わら
甲子一月志夜なりちれた文中治ん
つるしふありつらつらあき明るは師
よ後惠席のちを架とる亮えの歌鼓志
上平乃わわけるよ撃手路く少将いあう
そあしつれある

月もお明し一月亮もお明しとられいな
世八し頼れ亮乃つりつらあし

中よりなりしころうらむるあまのたつ川
乃木立ち乃先よしるもそかんなるいとそれ
かゝるるかほははくくもいかにこの事を
思つてゐるに當社大かたれれその先われ
く我くおとさるく因は志ははと人皇十四代
仲哀天皇御所依婁伽羅女神功皇后乃御
腹よ若姙時よ新羅高麗後向きく承朝
とぞこひけんとせし母皇依女神帝志御所を

して新羅とらり半せく朝朝へ海よりく
て女子産姙をり恋神天皇をこむわれ乃
後唐國よ陣乃大主しり王ましくこ七葉
乃姫文わつる留姙ひちりたんふこつあゝ
所事たつてます父乃大主治られ若る八世七
葉なりいふある志こいわくかくおまゆゆと
御守わわられの姫文わつる行り我とあ家
みあまの朝日むの志は御所先とつて

武清の母より心みわづれくたぬえをわたり
所ハ他事ありといふと中へ居居て大に泣く
乃んせと決りしわの先を執へてしめられ
若る母を乃く中へ當列乃とよわすなり
東方より日本國と云ふふ乃神の如くはし
美園す大に勅定ありけり公をいひて
く誕とあるをいひてわの子を名にせしめ
是れ日本へわたり給へて珠杖銀杖下鎧と

しつなきもくきり一人を船小に居をせしめ
海はるあふと浮可星乃波清と云ひて
巨海と云ふも日本列大なるの國也本
浦純子乃清の妻給ふ鳥乃羽をと云ふ
危ちれのみことありてわの如くわられて
姫文を船乃雲と云ふそは海にすれはす
てふけよあふり浪を音と云ふ公にあり
若り伴乃鳴いそふも成くいよれ世より

これハあそ鳩脇と居付たりいんまの二
志杖藜と云る包りて別仲ふいり給大
菩薩と云しや鳩とするまの寂初よ吾
胡よ志給ふ母御じり小まいりるれ也そ
尚回乃て神とやういふく大まみのふれ
あそ一卑人とうらて石く誠志思乃よそ
りりいそく卑人夫くろしとそ并隅前海
老隅と云藤頭良向れ仲ふ宮室とてそ主

子と産給たり則天とあふ我て我正是志
はよつた怒神号と行らんといひましく
志そ乃は天よりハ乃とそあるとつわし
れよ八幡大菩薩と号といふ志七歳に
交とて八幡に神功皇后と云り怒神と
と云りといまの八幡大菩薩のは事也同
位志御母と母とあり宮室乃今とそこ
とましゆす御賢志徳志ありとそ成り父

ハシククウクド屋々御本地事石舩よあつた
船へくる舟の文ハヤクハ守り入る事
金銀云

首於靈鷲山 親妙法華經 今在正高申
示現大菩薩

中也はふくハ所りんちハ新造とわらえん
朝よハ情二所とハ大隅守依男山
とと二所ハ申とハ申也申とハ言

石舩よそま流りは是ハ大もんを正ハ
懐とハ号もあふりんとハ異國に賊流
可龍衣来りてそのすえわりてハ
はりて大船一五艘とハ文みをとてい
見せよ高別よハ記湊わたりて小もん
とするとしらは歌とせりたはよ一歌
乃中水田島二の余町ハり乃船と流を
流よハ乃船の斗異國とせりて

敵すんやふ退る一忠成よの徳と白鶴
と号すもすなさら八幡大菩薩の御方な
り七歳乃娘とす八音の神功皇居同位
志心とす人なりたれん概か國糟屋東郷
音推文よ法と云まし一由と所母大母神
知女とす也異敵降伏志心とす女帝の身小
し人少く乃ららいとすなり逆謀とすりそま
よ小の智慧乃徳とにたりとくたてうれ悪

賊とすの先姑いつて日取よ志とすなりなり
因とすなりなる靈神なり杯八幡大菩薩
字依文より行友和尚志心秋よ志とすなり
てたしこ心いし水よらりく和光同塵
法縁始八相成道利物終とす徳くよの
身んと志とすし志法とすれ始と石神銘文に
か八幡乃御方んとす天迦とくわとす也始とす
末代志とすふとす行友乃法とすなり始と

一海より深地志こころんを現し給ひ又人
菩薩乃御まうりふ放生舎といふ事あり神
功皇依志音異歎と務めんとて早珠と
大海に入給ひしとあゆむ志生せり給へし
大すみふたりにまゝして日向陽とつゝ信を
て較多れうらうの志意とてら給ふまね
かろ若御う志とあふとて御候殿と名給て
生とんちの舎と名とてく梵網經とてく論

三法へり毎毎八月又月れ放生奪ハヒ
也あうしと先とてく三毒神よりとて給へ
とて同位法母り人あくとてら給給ひとて
如き法とてれさしとてあうとてたりか給
先の釈志は歎とてりしとてくしとて給へ
まゝつては成層の思ひとて給ふとて給給ふ
何んをたしとてくしとて給給ふとて給給ふ
とてあうしとてハハとてれしとて給給ふとて給給ふ

これに若菜よ下白き世に流しあり若菜
ありしは通の妻女ハおね乃京少くはらん
志より一人なり名我大に殿れ侍りた
橋つ耐胡を中の中首のしす先よ童若
牛五殿とてありあるうち及入道殿れお
八條小文此久く細若志は此のそ
依りなりあはすす四つはあやうく
事柄も優うりりりおねんあてわり

ちよ事やあつるくおねんこれ
流してろら細若友とのんくうふ文
江とすい海くおうりたれはあやう
くく入るわりのは通を入道殿御氣
まふ此のあはく故へろりあつる海は入る殿
乃内よはなくおまい若りそ乃海わく
さ後よま乃細若殿とん世あつるあは
えくあはなとこおねんすあはつる

ハカ乃信通々えりし事人として、いん坊
け家ハおの殿とハ信通々わりのりもあは
也ハ一度はせあくんもいん坊
乃松よ赤のひろりくもてんそまうり松
色くともそあくそのわたりれきそりく
いん坊けれハ御春房ハあわたりといんじ
取ハハもいん坊人なりし事あはく
り折りハ折ハあはくいん坊

乃くそあくハ乃松とく大すみあ
下知ハありの信通家よつたりあは
かおハいん坊ハもいん坊人なりし事
いん坊く見する事ありハいん坊ハいん坊
いん坊ハもいん坊人なりし事あはく
ハいん坊ハもいん坊人なりし事あはく
と信通家もいん坊人なりし事あはく
ハいん坊ハもいん坊人なりし事あはく

いさまたてえん 君よりいさ気 受取ふふ 西より
通取とてい 心取りす 取とす 心取と
そ 浦一少お乃 取取乃 取とて 取と
るふい 取と 少お乃 少お乃 少お乃 又見
を 取と 取と 取と 取と 取と 取と
いん 少お乃 少お乃 少お乃 少お乃 少お乃
取い 少お乃 少お乃 少お乃 少お乃 少お乃
こ 取と 取と 取と 取と 取と 取と

八 御着後 後乃 御着

かき あり あり あり あり あり あり

御着

少将

君より 取と 取と 取と 取と 取と

中 取と 取と 取と 取と 取と
取と 取と 取と 取と 取と
甲 取と 取と 取と 取と 取と
宰相 取と 取と 取と 取と 取と

去るよりか乃端よましくくゆきあて身と
つれ損く病もつうそたすらんさじこ
小るくこと乃りゆり道少くわすし
ゆまゆへー地を固めゆきなよふ不
盛る不傾りけむハのよたりにて身
とこいこりくゆき風やうふ成る
かふ乃りゆへとしつふれり若
その冬ハか乃店よゆりて浴浴な
て

便心風とせゆゆりけり
ゆき
ゆき

学生堂衆合戦事

八月六日学生義竟四郎と大將軍と
て堂衆十之字よりけりゆき
こらく志資財雜具と也補一たて大
納言の衆よ城をくこりてこ
八月秋堂衆心こく東陽場よ城をく

とある人々大納言とふふそこのりなれ
学生と名残す堂衆八人さくらとさくらふ
せく城戸に入路先よりさくらも残学生義
竟四郎とさくらとせくさくらとせく一海
かりうらみせく神八人乃堂衆川
よりとれたるを義竟四郎よりさくらと長
追一げぬ神堂衆より名くらとさくらと
とくらよ義竟四郎長刀志柄といふを乃

追一げぬ神堂衆より名くらとさくらと
てめりもる浅くひとくらとせく大將軍
せくさくらとせくこれより名くらと
より十日堂衆東陽坊といふそ追に四三
ヶ前へ下向さくらと四神志柄の意とさくらと
数多乃嫁と引とれとさくらと海らやえ
せくす堂衆おつとハくらととさくらとの意
とくらと右盗右法盗山賊海賊とせく

物つる米穀絹布を以てわづらふれし尚
國也也也也也他也也也也也國は之を以
乃ふも也也也也也也也也也也也也也也
うんも也也也也也也也也也也也也也也
九月廿日堂衆教文乃路とあひかして
ふも也也也也也也也也也也也也也也
こもる字も不目よなも也也也也也也也
ゆんも也也也也也也也也也也也也也也

思つてあつりよとわりの若れよも也也也
公家よ藝國一武家よ也れ中なる公堂
為師も乃命とせしめてわくゆを
とるる衆徒も誠とくも也也也也也也也
國乃愚徒とわつりよも也也也也也也也
言我すも也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也也也也
とつりよも也也也也也也也也也也也也也

乞よそ院より大改入道は信光も入道
院宣と仰くこころよの御人湯浅持守宗
重と大將軍として大衆三千人宿共
二の余騎初名よの余騎とて一はらとす
はく一人并いはここのくふ御家伊勢は
乃ふ河内忠成也とて人こ忠なるり
あり十月四日字も人共と給く早尾
城へをくすに度ハけりありと思せり

衆は人共とすく人共とす宿共ハ成
せとて人共とて思合りありとて
乃らくくく給ありとてのち一衆衆
ハ執公ぬくたれくはゆりありとて
難ぬ不乃わく業未ハ難ハ法盛ありとて
生より分れぬ衆乃とて我一人とて
乞ふれぬ人共とて字もとて思ふよう
ありとて戦場ありとて死せりとの二衆

人年といはれ敷と云ふ事の中を因らるる日
字を一人と物にす下流して何と云ふ
者しつといはれ敷るりの中を因らるる日
の上は若くは講説の中を因らるる日
をうく思ひたみさといふ事す所字を因
らるる事人の存と云ふ事す思ひたみさ
思ふは花とに分る事す三諦即是の故乃
月と云ふ事す義竟四郎神人一人と云ふ事

へありし知りも中と云ふ事す思ひたみさ
らわらんす事す思ひたみさの中心と云ふ事
乃こよはれ敷るりの中を因らるる日
心門を思ひたみさの初めは神人一人と云ふ事
事しつといはれ敷るりの中を因らるる日
を思ひたみさの初めは神人一人と云ふ事
を思ひたみさの初めは神人一人と云ふ事
を思ひたみさの初めは神人一人と云ふ事

十一月七日字をよ上夜竟賢并威儀師

安明太夫將軍として豊後うつてこのち早
尾坂志之をうへとて海へうつてあか
よしく事をつたふ勢あやうされて軍へ
にまうせぬ事を志せふうら若百余
人も乃後山門派あれとて、お塔底乃介
八心伝乃傍伝りま——當山草剣りあ
おいしきいあく乃——志事ハな——志
すくよわしきいあつ——吾若たよはく

なれもに也乃人ハよはく智老乃けあ
しとたよいされハ皆あ——り剣く
人す此山や成よちり仲きうんたよく云
者も又う場ようり八日ハ巻終——志田な
しとて南無と語くまな——卯月ハすい
ちあく乃月あしとて金い——く城はく絶然
ものまな——あを乃あし神さひく河志
ああんもあえよちり二百余志志は地

とわつる入となく六時不ひ乃音を節
かりといえやふらん賞会うくうを
へく三重の花構と善漢を仲よさう
とさみ棟梁けるふ遠くはうんのころこ
白霧老無うりさめくたうりー高山
かりさる事と今ハ供佛と筆乃冠
江金容と空漉よるわす秋乃月志也
とく大とわくもく天井志いよりり行

乃いこ間よりもるあつさ乃露ををれ
て蓮座乃よとわいさふ又束代心塔よ
とくハ三巻志佛にも次書よ治つひより
やとく天ちく乃仏勢を在中編うへ
ハ音尺らん乃はとや記知ハ一祇園
精舎と竹林精舎と松楓獨を中
比より席根野了志すみふもがり礎の
しやびるあれ白鴛池ハ水うて草れ

こゆくきりぬる選元下宗乃れしんや
若るみじしきりて思震且思以は
おのしきりしきりて思震且思以は
林寺も泉寺もげしんハ絶絶あす
かりしきり大小宗乃れ文と若乃應を
よむる善提樹院観音乃聖像とわら
ちふしめれて鳥琴とけりそめりそめり
てふ遊代よ及く鳥琴とわらしきり
や

や一語の思しんと思わのしきり
若れ家胡の佛は又たきり南都七
大寺もみりわれしきり八宗九寺の
うん思瑜伽唯識乃あきり乃あきり
文もあく東大も真福寺若れ乃あきり
一字りなりしきりあきりあきり
ハあきりや好しきりしきりしきり
のゆふわれしきりいしま天物のすしきり

もてぬ者玄將之藏貞觀三年の比佛に
と弘法人少くして其の意を并たてぬ
弘法人四へわたりぬ一ふ去秋寒暑一
十七年耳目見聞一百二十八箇あり一
百六十余乃よくと見まりぬ一ふ
大乗の巻ふ巻ふのふ十又箇うわ
わらうしとひらき月氏者さう并よ
と弘法乃ふ乃取たわりこころわける

はまのやんやむ事さうりゆる天の巻佛
はと法承乃いふふとわらひとてぬ
あやと公あふくころあまうとふ事さ
一離ふとさうりゆる僧乃伸よ意志はし
延よ書つて

いふやうし我をよまれぬとてふれやとて
着侍友大師當心華劍乃後阿耨多羅
三藐三菩提乃弘法らよいふわらぬ

ける事と云ふは、
一、くも岡を、
弟子天谷屋、
少くかり、
あ、
事りうも、
いと、

尊園阿闍梨心事

思ふ衣を、
きう、
た、
けん、
と、
生、
乃、

む由乃勉よりた里く学生志うまら
わくゆひとさうてわひまきハわくわ
わる包こごとく学生とこととんかぬあう
たやまらハ我らあらん中ハゆりごと
わらまうし学生とてやとすれはまら
怒福儀といふ事ハあんとわたり
いハあむりちうく金剛書後乃舞
覺尋持信正法心の海より之塔は夏衣とて

後書とく佛は花音なるもて因ん

善光寺築上事

去三月廿四日乙未の國善光寺とて
君とて此の國えわりのけり
天竺毗舍利國よ又種のお病とて
んう孫とてつたし月蓋長者うさ
君いよりじも先よりわく病つとて
う一月蓋ハ外道う芽子なりとて

尺多ん乃みまるとよまうくくせむるの毎一
人よりてゆむす先り又種乃わく病はこ
てゆ福くくくハ尺多んは悪病とをゆ福を
たしハ福ハ幸ハ福介道とわさびさそ乃こ
まむるハ家とそ乃悪病とをゆ福を
さう物と乃こまハ日月蓋かこててせむる
ハ家ハ印通う弟子あそハ印通うハゆ
及ここる外道者門とゆくくく先く

尺多ん乃印弟子よなりくそまうのゆ佛意
初指りすハ外道といハ家ふさうゆわれそ
ハ家ふとりのく貴しと思もくハ福を
そ乃福福の乃こまハゆハまよハハハ
くそゆ佛意わく病とをゆ福を
ゆ人ハ是なりゆあよ十百わく乃余とハ
ハそゆ佛意わく病とハ福樂せういと名付
その後ハゆ福は果とゆ福者たりのす

そ清くまじく瑞よ又種乃わく病と云ふ
もみぬり人する世も世と一八は月暮
もろ八二道又天香乃即部と中つる一
の十方朽くまて中をく居そくいます
なる深遠ゆ来せハいしく清くまじく
こととせ八尺ちん乃さまひある十百億
まてと切くたう一すの来成ひ人をも
もす使若をりてハあつて一こようた

之佛乃方便者なり一こあるも一法一
甲乙六字名号といふ事乃わろ成も各
乞由命乃一系阿字名号ハ佛乃わろ
うりこれせあるのて六字名号深羅尼
次心といふ一こぬゆよじりい一まろ成
会くも尋深遠佛と一ハ西方より来
くまて中切くたうするわろ一ゆ来すつま
須史志る小来片、わく病と云ふハ法

するをいさなす一入給ふ月蓋とすうも給く
減ふも川をくゆとて死のよしけいひ合書すい
ふ名優とさう一つも守り給給給くとこ
今んとあ人もそ也一観音せしつりて
月蓋の窓乃主人よ次一給ひは一十方へ光
せんあら給ふ佛者光一りおされつわく病
うらふ一給ぬ月蓋のむす先のわく病や
いのこよわすすちうく死一るよのこ万

余のみあつ活のきて何給給給給給給給
中へ改給ふとらうよ月蓋長者と冠よ三
今んわさふわつ給給給給給給給給給給
より乃らいふして評一なる人三給うくハ給給
ゆ采極らく御王へわむらうて木り一ませと衣
給とをうしこなもくかあ一んぢく天ん乞せ
見給ひく若我若我とわあつわさこ如来
若御のうらとやう先もらんぬらふりねん

昔者と論交へはのりくきんぬらん心して
終りてせきと天とんとわきうと長老と一公小
て構うはくもり一傑大指中指申す令
相去う分女也
深絶る像圖浮提第一靈佛也佛滅志
終く後天ちく小そまりたう寺中又百
歳はは東漸志とつりあきくもくさし固よわ
く事始むく一子厥乃後欽明天皇御宇よ
及く遂にたり御ふを始ひくたふも若婦

はよすて死れて光るのり始ひてなら奇
流右子世く始ひく遂に守屋を討く
難波曰天王寺よ仏はとむら先始ふ母志
たのふ乃民女を吾光年真運上もいた
先ふたふんれ京へるのりあるはめあふハ
かりえと始ひく十方へ光とあらつ
しをふとわくつてるさふひなるハ世ハ我
う三牛とあはんなかり我ハあんちうこさる

落部と云ん志東人かを吾先わんち
しなまこりこ乃のこ又百八十餘歳乃
是之を道給よとて國を主はたふ
んとてハ佛に先滅すといふりされたよ
た切後よこしとわし事なり記述する事
もあるくわりの一也ハ主は君と云ふ
を先と稱相と云と歎あつて

申宮御智事

十月十二日也乃海より申之者は氣
わつて瑞給とて天下乃、よりわたり三月
廿八日ハ、らり母、その氣わつてせれた
し、これと云ふ事ハ、なり
海御よは曉よりハ、い、あ、わ、り、さ、う
瑞給へとて御、え、な、り、す、と、平、家
乃、一、門、お、り、小、及、つ、子、関、白、殿、と、う、り、を
て、こ、の、殿、と、人、沈、く、お、せ、る、は、御、の、お、た、と、て

乃小門より御幸あり御老人之也よ高倉
昌雲支那正豪禪實金支増於後其氏
平以上は皇之御中へ是始ひあり内大臣
ハ吾意よはしくいとさん無一人よりて次
こ一日をこく云迷あまの御中より
より始なりややあそり始ひ家系
権亮少将維盛た少將法経繼前侍從
資盛より御りつとせよ也く御馬十二匹

釵七腰御衣十二支ひりよこよ入くま
られより三よりとくそりけり毎廿院
后之乃御産志は初よ母よ乃入て大
教りり事え例也且大治二年九
月二日侍賢の院乃御産言は御産
生何也大教められ也そ乃例とて守
科乃若十二人寛宥せよ家内表より後
二よりみより右中御通親朝臣左中御

陸奥郡初長有田の檀波貞沖物長藏人而衆
路に木各二三ありて此の木の水はよ八寮乃
沖馬と名くもいと乃於と度ハその後あり
殿上人との車少く此の木の所なり也
八騎馬少くそわりせむ八幡の末日春
目小野平野大原井より行啓ありて
りし御殿と云ふる路白ハ又檀波降二世
乃阿曇梨金玄法中少くそ書えし又神

社よハいし水賀殿と云し先にもく
小野平野いなり祇園今西交東光も小
野の寺にて十一ヶ所佛ありハせう大も具
後寺は磨蘭城廣隆園宗も小の寺にて
七十回ヶ所乃沖波檀波の神馬といふも
大神文在清水とけし先月の路いつく
小の寺もて大又社也因大長を御じむ所
まじり路ありてハ寺ありし文の山

せう宅めて木の子もう人ぬよ父子れ法賢
なれ八寶法よと東つ院御座の母御堂
関白神馬とせなりやその別おくりや
く度又除大納言邦總神とせとまじり
皆く事とるゆゑとく候あへり
少くううとるゆゑとく候あへり
乃成とるゆゑとく候あへり
は親王八孔雀経御座は心度とる候親

五八七佛薬師は長史園恵は親王八金
剛童子法は并又大虚空蔵六観音一字
金輪又檀は六字河陰八字文殊普賢
延命大織盛光よとるゆゑとく候あへり
る色よ佛士は下とるゆゑとく候あへり
薬師并又大馬乃像はくありとるゆゑ
御誦経乃御叙御衣法守法はくありとる
信御座よ八文徳御座よ八文徳御座よ

かとお母えてうらふと申ふもはるれ沙
夢乃物たりもふふとてし一際事うり
てしく皆身乃けしる後をさうしれ
おとりのふれよりまことと傳也りのと
あしらのさるりのうりその母は里御帳
ちうく辰上る移たりしもしてお半御とた
つしくわそつして治者ありせむる無くは無
一睨定まよハ鬼病手来テ懐念隸三過

床上下ハ魔軍かうるを成りくおるの
る無きとありたは先は陣おしてうんよハい
つしく追付をへふいふいふわわらう
不志わくまよとみる丸う羽悉少て人
也かしとてうまハあうすやまとい報謝
乃の成しそねせゆ先わふ際得てりす
小及らんかそのもしるるる守達はゆり
うりて記とて

母とすと続まつ留く金乃衣文字志強
九十九文御枕よとさく御そ御せ
乃と切まつ留後在連春の後の御妹
河の此方いこ記まつ留後在連春の御
時志つ乃小方洞院殿御乳付小月いり
始い小方り圍基辛の後まつあり
御負依也をよのあこととつれも又別あ
派申也は御ハ新熊地へは御留あへ

三よあそわり多れいそ記出まつ
まして沙車と門弁あつてられつり者
いり女御依者は産つねの事せれと
大上は御乃御とん若く希代志別あり
前代也とすす存代わりあつる色
この書帝乃依文あつり女御へはは
皇乃御乃一後まつる人皆そ入道
とたりく若くあつる御り記出まつ

きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ
きよよにけりきるるをくす人きあ

きん者乃語く小法曾小戸の場
いよきまわ乃語きあくわりの者
文を法曾語く九八きん者
とすくをさしき語わりの者
と人來七日に法寺殿あく法語用
甲あるをさしきとやと京童り
隈湯頭 equal 下たわりの者
あつり法をわりの者小井保り

けし先母のあゝ母を母つれくさうく
おしく依けるふ救世をくさくさく
ゆきふ男のあゝくさくさくさく
きりり門名あゝくさくさくさく
入道文と見あてあはれけ者いふのせ
いふ来ふうんたれすいさうをさうく
あうんとおしくいふあはれあふものせ
あはれあはれいさうくさくさくさく

うの縁まいさせんさくまいりて依る
さハせい先并そろ何せなる家乃か
ま乃前よ前乃せくさくさくさく
さゆとあゝくさくさくさくさく
さくさく海さくさくさくさくさく
けすい糸あて衣とあまゆかあまの海
あまゆかあまゆかあまゆかあまゆか
まいせしあはれあはれあはれあはれ

見る事あらは鳥志未乃枝で生いて西へ
ゆきとんとてうわゆと申されはゆくと
乃うらハ船の句一三三申あくわわ方あり
とたけり一終り一なるらち成た大に殿は中
なる物と申場とてゆり桶と申されては
けるうら葉とて蛇といふ人となす
乞わく河あり流也いふすれは乃成
いふ申るに陸陽道もさし人すあられ

定くきめてゆやんと申あられはふゆ
あくとそひ能くれぬわう一徳と申也
うらるすい葉めてゆを乃流と申
又代もわたりゆわりの根葉と申の
申てゆみなるハ色さう一なしく
流のうとそ思ハすう一は乃流はハ
す泰親も御産ハハ川を定流して障
子をみるわなくも色流ハ決つる

たしき山戸すたき足乃今心いり
を親の心いりし中なるは
すてやいふれは海去り封し
しうしやす因大臣事いし
いしきしく神女なりわられ
ゆきこれとて沙馬定ま
よ福く福又いふし
せぬいり大に殿く
せぬいり大に殿く

そんぞりし海を毎國
しるは下と八松りえ
はえし今及もいし
ことわりある中り
大よは望乃沙か
事かありし足
わされし海後
るゆき

諸君は江一...
わ...
非...
ま...
あ...
し...
屋...
不...

してわ...
あ...
へ...
乃...
あ...
産...
同

松殿岡白基席

女青院大政大臣所長

德大与在位實定

大欽沙門在位實定

月輪在位兼實

小松内大臣重盛

源大納言定房

三條大納言實房

又條大納言邦經

藤大納言實國

中御門中納言宗家

梅原俊實實

花山院中納言兼光

大御門將時忠

藤中納言實長

別當春文大臣忠親

左兵衛督成範

右兵衛督賴盛

源中納言雅賴

權中納言實經

曾大臣兼大臣朝方

右宰相中將實家

平宰相教盛

左宰相中將實宗

六角宰相家通

右宰相中將實法

如河宰相賴定

新宰相中將定範

左大臣俊經

右大臣長房

左京大夫俊範

右京大夫實親

善提院二位中將公衡

新三位中將實法

以上二年三人右大弁并八出衣少之
不系人

祀山院前大政大臣忠雅自述年前大纳言
实长 但布衣也总之入道者若法
入向法寺の 大文大纳言隆季弟一女法性
守殿河子息左之位中将兼扇室去七月
乃比罪者若事ししと出江なり 名告
と河しと山也前右大将宗盛去七月

室家逝去乃事ししと出江 名告
河等乃母大纳言并大将支宿禰
中より前法部卿光澄逝後右河子息
二位中将基通官内卿水靴七條院理人更
信澄藤三位基家持大纳言初任新三位
隆輔松殿河子息三位中将隆忠已上十二人
國元 涉院法依殿ししと勸賞せりしと仁
和寺法親王八出家乃河河法少く東大寺

欣遠其れ之及七日沙欣法大元法灌頂
真約せらるる念心一々宣下せらるる人沙
弟子法印覺成よりて權大後部より記
せらるる元之文六二品并半車乃宣旨を
尸衣給ひる式仁和寺法親王御中
之場給ひる方よりして之んらく河弟子
法眼園良と法印より叙揚給ひては
事慈人願皇太后之文大元右兵衛督光

徳朝長形と之と法と醍醐寺宣旨
余流權少僧部實繼准服牛王初持と
中先大僧部より記と法印右勸賞
是は毛舉よりいふ海わら次右大持
心保よりり乃少僧部下より記
記れよりり乃少僧部下より記
甲辰年七月より河弟子
よられは左侍將河乳母小うと

とすし物しとそらしる上をわてわわ
けるとは因人神とさるるなりしわ
それよといわゆるふふもたぬけ
さる殿より乃少松乃とわて哥を
感るゝ世なるさ先なるうさ成おもて
はくせし

とさるゝ物入るに家計しるわりのそとあつた
倉庫とていふ人ゝ公とまれなるなり

かくしとすはひくしとわてしる事
よおのゝとていふにせういよ立出治りて
常くく中よりわてしと申治り
兵衛尉とていふとていふ所なりし
出方の物とていふれあはと盛治巻
箱百とていふ可也とていふなり入
たりしとていふなりとていふなり
とていふなり

為八條被立札事

入道及乃為八條者宿は乃東門より
沙一打なり也。

世は凡終り終りとし一人者たより
あしにるまはわりのせしれとて
候りとし一徳中平入の禪の者あり
い旧宅よ録そ乃にたあし
いまはといふるふと先記をたし

初より高聖王老時より
物く大衆乃宗とうちりよわく
甲ふりて天よ業しる事
うる同忠盛の昇殿せ人
事よたりの御相おとる
初より中よりえん
忠盛は心とえて
とをぬる希よ初と

一に君と云くしてすてよ三公を以て
ゆるも事一なるは先世乃以て流る
弊もわらうと可也念ひて君にりわら
すやしのこも昔を思ひ御しやとみよ
て政乃君とわけ身乃君をわらうと
しよと云くはなるは流るはわらうと
せんとの心と云くはなるは皇子と流る
持くすてよ并に父よわらんやと云く

しよと云くはなるは海と云くはなるは
と云くすはなるはわらうと云くはなるは
欲心ハ身と云くはなるは又云くは
よと云くはなるは一代乃云くはなるは
皇代乃悦ぶと云くはなるは又云くは
身と云くはなるは又云くはなるは
しよと云くはなるは又云くはなるは
うりせむはなるは

念ひのしるえいせきらつぼくわぬまのうらひ
ゆゑのしるえいせきらつぼくわぬまのうらひ
うそいらられもともかなつすうやう事
ハ歌人文者なしてハいそくうも金交して
京中名も死人文者として成法くくく
あつたれうりたねういぬうにんそ
わりのある小松内府中うれりるハ山井三神
ハ無実とらううんやちのいぬよんう老

けいハ一人の取柄ち電する頃百人を先
一とまう人車法人老歌なりゆん文法
ちり老折ありうる金うすたやんゆ
ゆめ乃ゆふふく起法文とめゆめく夫
とまのりてやう成ゆゆりやとゆめ
とハけ成りる金うすたやんゆ
六人とりて天神老ゆふふく終目成
か乃起法とめゆゆりるよ羅土水令日火

計月本とて九曜乃仲よ火曜星又計回榮惑
星と云け星七十七星朝とるる百鳥也
けよとしか乃星名天下乃事と仁は也一
てやろまひつらんも乃仲よ一人とて夫
をわつすもあぢ一也へるんこよせりハ
賢人母乃ぢん成ちせりハ政道世一也
死つる也いなりけよと大に名とるり
一人名らんする事と歎思はひ也よと

天神乃沙也一也あひしつゆくんと換
せし中夫とハわろハうせ海ハうわり也
わられあり起法文とわくともら乃人取一
子三百二十人也

宋朝班花大臣事

昔うてうちんを大にハ一日一病名
中よ一人詩人せわの君と酒の風流を
とる路て見おといし乃入道とる海也

一夜若申し一子余人歌人せわめきて
中ふ小宴せし中てそふ所本胡弓としか
これとて權威者名程乃ゆしとて遠く
そむか申す

友鶴次弟事

今度若いはく海島をいよ入道相因巻
う若つをわりの光守りては口の牙と
く志もうとく伝志の海神とてらよりて

まいし海くろらよ二位殿給ふ由し水
よん給ひて若り皇子誕生しとてい
浪をうす中懐く下りわわはるき
ありあるとてやせ乃比京童とあるは
うよ祈禱とせしるものわじと先
序をいふくまこをまうるまうとて
は初んを若くあるはしとて大事
とてしるる早家いはくとて

給ひける事ハ鳥羽院法皇ノ法盛なり
乃如んたり一母のふふとて高野乃
大塔破壊よりりりり法造普を
と院より法をされたり道ハわさ人
黨よあんなう六ふあこやいふ斗の侍
をなめりつさく六ふふとて法を
よる入道あり入まうて法して法養
と通ありは八十を餘乃を法ありは

高よにけるさう法して法を二并り
ハ曰海老浪とて法ありはあふり
杖よとてあり一人の法を
いりて法よの肥後寺殿よの法あ
ふ者寺殿乃んふよ乃法ありん法
寺ありはれは法ありは
中事乃りりりりりりりりりり
とたれりりりりりりりりりり

友より一こへ也法一入をり思ふ事
へは是法乃る事いんるハ高貴なる人なり
送文一法ハ法事其貴一しく也又
子母乃わんもる也其らせん名國守
乃社ハ金剛界乃神也小階道ハちくし
やう道より法わち此中ハちくし
道乃くらなりこれハ小國法也
しうハ乃前ノ法也一氣比大なり

乞さわれ之法ハくは前乃地也
一法ハ和光同慶者法縁也一
母の法ハこの法ハちくし
乃て是世一ハ法也一
法ハちくしなり此法ハくは
法ハちくしなり此法ハくは
乃さうんなりわさ乃く
ハ胎藏界乃神也ハ二神ハ胎金也

神妙の智とて後山と云ふは此の如し
以て白鶴降るとして此の如し
と八法成す如し此の如し
寶冠と八法なり我々の如し乃無試出て
くそ如し此の如し下如し此の如し
余して大脚此の如し此の如し
わわ此の如しよ奏國此の如し
と乃此の如し此の如し

此の如し此の如し此の如し
とこの如し百女同此の如し
此の如し此の如し此の如し
始此の如し還宮此の如し
神也此の如しつと此の如し
此の如し此の如し此の如し
此の如し此の如し此の如し
此の如し此の如し此の如し

よ賊と云ふ人止むをせられしりて今
生るもやわやも今一安くおせし大
之小色く次とて大海神わくし路路の
怒情盛候くそ乃貴法系よ通釈其れ
うし多れ大寶度ゆりし路路の心
海卷し一系小長刀と銘りるらん一り
字もりらかしくるそくさくさくさ
くれハ後よわらわしこまてこし神路

つ下向せられよらりそれくわくそ
平家よ一いほく一ま乃大明神とこ
中よ業致し路路の
岩崎大明神と申す後名神一由一乃
寸佛は真の者わく一慈悲并一乃明
神也安端罪龍王乃娘八歳乃御女よハ
一神と云ふ依れは一いりて後娘よハお孫
たり百とて古後一善散とていふ人

ありし小皇城ちのく中たがして九列
より寄給へり世乃年記ハ推古天皇の
御宇獨政又年終九月十二日より御流
るふいなみ野よ七勢鳴麻わわ御門え
いんわくも中編言わわ流御藏本編
云を承く何内御柿の神乃まゆこされて
らよ流うわくいなまゆよへ入く件名麻
流射とて見えよ入は麻令は名麻

あく九色乃麻が重くこつ會議わわ昔令
是乃麻わりよま乞橙者なり中し令り志
これハ少んま流せりよ乃寧罪科やの
し中てあさ乃ま流らえゆり流る
流年うん流何と流んこま流流く流
なく流御ん流うまわわ流んわま流流
平あふ流流してけ浦と流流あ
里く流流らよある目流よ流んりふ

たきろくくはなれえくれき舟乃は我
物とる大船一艘出来りくくはなれ
船は六つ戻り乃はかよわくはなれ
つとくきん物に任せ沈没りあひり
船つりいふふとんるところは上無者中
より同者貴廿乃十二一重よなりん船へ
るり我ハ乞ふ者ふくわりはるりたふ
心あるかすはるふを極むり我既小

食物をえくはく道よ乃そ先わ合事
わくくくはなれ船は八重なりん船
あそりて柳ありしは食物にありん船
りすもせははるあくもわくあり
はくろく船あり白米にそはくあり
いん様もは舟ありあき者又舟あり
物れよはいしせもははるあひり
とせむわくくくはなれありん

てうのんまの成る如く一了らん中歌
之が也若葉よ山に作られぬ事やうり
してなる處ハいほくと平海に擁字靡護れ
ししし

大宮より八右九中八十六の象法
ありせんよほむと世乃寸を奉徳也
いまの飢を御あ怒とて象法よりせむ
とありふさるる人々ハせんら名進とと

水端成るせよ世に流られ首の二舞を流よ
とさういふ海流うりともあはれをさし
あり乃浦をいふまうふ入出あり乃浦み
うさ此候は雨とせ流らんを歌よ中に
みもあり乃うらん見ゆは流んまむしりあふ
沙流んしてあらいほくと流られたり
りていほくと流んと考中も八流實徳也
もそ乃流の神哉天皇長門國よりうり

もよおし給むし時比海乃眺望殊勝なる
うすしあされと比臨しつて路傍に
御賀乃まいとせさせくえし心わり波
名うしし舞臺を立つしそ蝶鳥乃森
と遊させらるおわりし夕日浪よりはり
て山者舞も又おそれたりかんさ
花とうみしつしは乃神と記るか合す
天よまはり波は人わり元は樂あわ

海よまはりあわ久しし殊勝なる沙貝物よ
てそあわせる御門と更はりし乃あ
里よ海は疾とせし御賀鳴也えと
さるまゝの心は乃明神御祠よしそい
はく鳴とあらしるえうり花本は流られ
取ハ少く御殿十七間廻廊百八十五
遊遊し我と入まらせし心わりあ
流しとさういしあ殿を流らりてま

せん出しすう先ハ一男少くましく
せりりららよハ三十三取少くは場路よ
蔵本部よ乃不甲朝よ申入も也治られ
弟也ハ我を流者之の世流人少く
て救ふとめうゆらすして上治治人事
いふ治をうもんともそれハ大由神乃こ
ましくせりら成乞へくも也家はうも
せりいぢみ野よ金色者麻よ現瑞しと

逐也治をうもく乳母とんくうあわ
ゆく上治して治養と治よと乃何處
為とわめて一二万株乃也く成味わひ先
く紫震殿乃上よと記大星三星よと光
成るちて皇后とてくはん母也くみ
て神成と奇道わく色くも治と治お
それく蔵本と治くも子由を申あま
わくも成なるもくわく御と也

そとく大なるる光之沙塵乃そとく
若くは小なる中なるそとく神領中八箇
所とて常なる處中下向とてく如若神
よ交治人といふ乃神之氣也擁護

朝日

我一心精誠と拙く孤獨乃遠幽と語と
之別道も法教一佛に法興行せんと
そ光なり河三十三乃大教と教と中と

道心も心教才一也其文も心よ白

一度教諸諸衆生 二途八難永離若

和光因塵法縁者 八相成道常作佛

中いなり一度うんそ乃事ハなりくわく
道と澄せ次とらふんわりの如法法縁
法法大師よ所ありん河とくそ交と
わたりなり永朝一養宗若りてり
ハは神若沙教なり法如毫門等法

これ思ふに大師之銘をなすは
くちのふくろのまゝにけうん二名あり
ついでに西の歌なりははるちのふ
ゆふの銘をきてか乃金松よけり
は筆よとらんはふいよ乃之銘松をけり
大師之銘まゝに執し給ひし事なれ
は後よふ支那乃山くそわりの事
はは海明乃母にえ後乃よ集むいわく

大明神よ金泥に奉迎一部唐靴瑪瑙
枕たうるうはあをまひてせられ
たうるうよ中比たん文をせられ

本脚觀世音 常在補陀窟

為度衆生故 示現大明神

わさ思乃下よかへしはたるん
秘容才一唐秘所少く人き
大心んさしつとて高野心よ

今く之れる人一人づりありてい
へりてはしは佛にてもいへりては
毎神明なりて思ふこと大なりて其
自來より報るる法なりとてい
ふん最重なり神よりまじき事あり
之事より教へしすすめ

大凡書山金... 神家...

山平泉寺有被付山門畢此條依不後當
山御瑞依以赤為怪所被直下也但合一心
之咲松諸寺之明次於自今以後不可停止
冰儀之監妨之由可被觸御衆迄之旨所限
也仍執此以伴家忠日記苑前寺秀吉公諸愿
久本三年四月八日 國土 氏部郷顯頼
天名座主御房 家 清原 眞作
育江仲納...

格不年何... 乙未年

天... 主... 地... 何

表

青... 年

其... 北

乙未年三月... 日

國... 上

月... 日

... 年... 日... 公... 諸... 意

... 州... 之... 教... 意... 公... 諸... 意

... 州... 之... 教... 意... 公... 諸... 意

... 州... 之... 教... 意... 公... 諸... 意

... 州... 之... 教... 意... 公... 諸... 意



